

村上 勝雄

<はじめに>

事を始めるには溢れんばかりの熱意が、そして事を閉めるには苦渋の決断と丁寧な後始末が必要とされる。今般、樋口先輩から「ぱんぽん誌後始末記を残せ」とのご指示で、まだ始末途中であるが原稿期限もあるので書かせていただいた。

<苦渋の決断>

なにせ60年を超える企業文芸誌はそうはない、とのことで英国のギネス本社に「ギネス認定申請書」を提出したのが7年前のことである。私の英語力では心配なので堀川編集員が添削してくれた。

結果は「企業文芸誌のデータ比較はギネスではできない」との返事でボツになった。

顧みれば、67年間の長い歳月で関わったぱんぽん編集子は100名を有に超えていた。紙面に登場した人物は1万人に近づくのではなかろうか。それにもまして休刊してわかったことであるが実に「多くの人の楽しみを奪ってしまった」という事実を、いただいたメールやお手紙で実感させられた。

休刊の1年前、ちょうど日立事業所の約8割の人が三菱日立パワーシステムズへ転籍したころから「ぱんぽんの経営」がおかしくなった。移った人からの購読廃止が増え、街場の広告キャンセルが届いた。

この現象はぱんぽん誌のみならず日立野球部後援会員の減少や日立健保施設（武徳殿）解体で剣道部、弓道部、空手部などが活動休止に追い込まれていた。

その後ぱんぽん誌1刊出版するたびに赤字が20万円を超えた。赤字額が50万円を超えた頃に発行人（日立事業所総務部）から新会社発足後の福利厚生費の実情と今後の対応について相談があった。その間、ぱんぽん編集部先輩たちに相談をしたり、現役編集員といかに存続させるかの議論を重ね、読者はどう考えているのかのアンケート実施など模索が続いた。

休刊の決定的要素は編集長を含め、現役編集員の大半が日立製作所を離れ、三菱日立パワーシステムズに籍を移したことであった。残された日立側にバトンタッチする編集子がない現実。毎回の校正作業は還暦を過ぎたシニア編集子のみであり、わずかな力があるうちにしっかりと幕引きをしないとぱんぽんの長い歴史に傷を残すことになる。幸い310号までの赤字は経理部長の温情で予算外認可をいただけることになった。310は日立事業所の工番であり、これも幕引きの不思議な縁となった。

平成26年5月の編集会議の席上で、「ぱんぽん誌はあと3号で幕を閉じることとする」と佐藤朝美編集長は皆に伝えた。

<丁寧な後始末>

ぱんぽん誌に関わった読者、広告掲載者、印刷業者、街の本屋さん、編集 OB など
にどう誠意を込めながら「丁寧な後始末」をするか事務局と相談した。

・多岐にわたる読者への対応

皆様はあまり「ぱんぽん読者管理区分」が実際どうなっていたのかを知る
機会がなかったと思う。管理は下記 9 区分に分かれており、その区分に
沿った対応が協議された。

- A-1 無料贈呈者(特別)・・・日立製作所会長や社長など幹部約 20 冊
- A-2 無料配布者(公共)・・・県や市の図書館など公共機関宛て約 30 冊
- A-3 有料配布者(広告)・・・広告掲載社へ 2 冊ずつ計 70 冊
- A-4 無料配布者(投稿者)・・・毎号の投稿者約 30～50 冊
- A-5 無料配布者(現役編集員)・編集員リスト宛 15 冊(有料購読も居る)
- B-1 有料配布者(郵便振込者)・定年後に継続購読している方等約 200 冊
- B-2 有料配布者(日立カード)・現役や OB でカード払い希望者約 250 冊
- B-3 有料配布者(給料引き)・・・現役者約 350 名
- B-4 有料配布者(事業所回収)・他事業所から回収する約 80 冊

広告掲載社

これまで資金面で一番お世話になった広告掲載社 35 社に対し、すべ
て足を運んで御礼をすることとした。会社関係は事務局にお願いして
街場の飲み屋さん、ホテル、料理店はもともと編集員が足で広告をお願いし
た経緯もあって分担して歩いた。ただ御礼をいうだけという訳にもいかず、
つついっ一献ということで回り終えるのに 3 か月を要した。

印刷会社

数年前に費用削減のためアイシーシーから、(有)アイデック(大みか町)
に印刷・配送を変更した。印刷前の原稿作成は(有)ナガイ・テクノ・ア
ートという個人経営の会社がずっと面倒を見てくれた。とにかく原稿提
出が毎回遅く、近年は事務局の「不適合日本語チェック」が厳しかった
こともあり、一番ご苦労をおかけした会社である。

編集長と御礼に伺ったら「ぱんぽん誌」がなくなると仕事の半分以上が
なくなる、と言われ“休刊の影響”の厳しさをここでも味わった。

郵便振込者への返金

郵便振込者は振込内容が 1 年分だったり 3 年分、5 年分だったり、非
常にまちまちである。多くの方は何冊分が残金として残っているのか本人
は不明で、大概是“残金多め”に思っているようだ。この返金作業は
事務局にお願いしたのであるが、かなり苦労をしたようである。個人別に
入金日、発行冊数、残金など明細を期して現金書留で返金してくれたが

クレームもあったと聞く。ただ読者から郵便で「最後までしっかりと返金していただき、さすがばんぽん編集部」との御礼の手紙もいただいたとのことで一安心する場面もあったとか。

街の本屋さん

ばんぽん誌は街の本屋さんでも販売してもらった。一番多く担当してもらったのは中田益男さんで、毎回5か所の本屋さん、喫茶店に配送、代金回収をしてもらった。

310号の代金回収は2月末で終了してもらった。

最後に、手土産を持参してこれまでの感謝の意を伝えてもらった。

赤字処理

これが最後の仕事であるが、すでに日立を離れた我々が手を出すことは出来ない。事務局で最終支払を済ませたあとで確認できる最終赤字額に対して発行人に「予算外伺い」を作成していただき、秋田生まれの日立工場昭和史を理解してくれている経理部長殿が速やかに承認してくれるはずである。

うまくいけば3月末までにすべての後始末が完了する予定です。

とりとめがない「ばんぽん誌 休刊後始末記」でしたが、後始末の大半はばんぽん事務局の面々にお問い合わせしたことになります。皆様も何かの縁で事務局の方々に接することがありましたら感謝の言葉をかけていただきたい。

永い間ありがとうございました。

(了)